

山口榮鐵 提出 学位申請論文

『英人日本学者 チェンバレンの研究』

—「欧文日本学」より観た再評価— 審査要旨

論文の内容の要旨

一章 チェンバレン日本学の淵源では、「チェンバレン琉球学を知らずしてその日本学を語ることはできない」という申請者の主張を展開する。欧文琉球学の分野では古典的名著として知られるチェンバレンの外祖父にして英国海軍士官でもあったキャプテン・バジル・ホールの『朝鮮西部沿岸及び大琉球国探検航海記』が十九世紀初頭の英国の知識層、一般読者界に与えた影響や衝撃の大きさを

新たな書評群の発掘によって跡付ける。キャプテン・バジル・ホールと交流のあったナポレオン一世が、「武器を持たぬ平和の邦、琉球国」に驚いたことも有名な逸話として取り上げ、当時の社会的背景と事実を豊富な英文資料を丁寧に読み解いて詳細に描く。また、チエンバレン自身が、自分の盟友でありかつしばしば論敵でもあったラフカディオ・ハーン宛ての私信の中で、かつての琉球国と自分との結びつきを「遺伝的なもの」として語っていることを見出し、関わりの深さの証拠として挙げる。

従来日本では、チエンバレンの「日本学」の評価を総じて肯定的なものとしてあつかってきている。しかし、チエンバレンの日本学の再評価には、欧文原著の徹底検証という視点、すなわち膨大な量の欧米研究者における研究を理解して彼らの立場から見た日本学・日本研究の特性を明らかにする必要があると説く。その結果、チエンバレンは徹底した実証主義、科学的精神に溢れる日本観をもっていたものと判断する。当時、親交があり後に袂を分かつことになるラフカディオ

オ・ハーンに宛てた私信や、チェンバレンの弟ヒューストンのドイツ語著作の英訳版冒頭の文などをもとに論じ、チェンバレンに対して全く相反する立場をとるハーンの日本観を対峙させることにより、「西洋至上主義」に徹するチェンバレンの立場を浮き彫りにする。チェンバレンの「西洋至上主義」を豊富な欧文資料によって検証してゆく。

次に「欧文日本学理論」を提唱する。チェンバレン日本学の評価に際して求められる理論的枠組み、パラダイムを「欧文日本学」として提唱する。つまり欧文原著を丁寧に検証する作業を通して、日本学を再評価しようとするものである。

「欧文日本学・琉球学」のパラダイムは、従来の我が国における高等教育機関における外国語教育によって生み出される専攻学生の数が歴大な数に及ぶにもかかわらず、その成果が必ずしも「一大成功を収めてきた」とはいえない原因にメスをあて、新たな指針を提唱するものとなっている。その我が国における外国語教育の現状に新局面を開くものとして提唱されるのが、すなわち大きく琉球学をも

含めた山口理論「欧文日本学」であるとする。

二章 英人日本学者誕生では、外祖父ホルの英国海軍軍人としての軍人氣質を縦軸に、チェンバレンの祖母の豊かな文学的才能を横軸にコスモポリタンとしてのチェンバレンが日本学者として誕生した背景を述べる。チェンバレンの弟ヒューストン・スチュアートがドイツで政治哲学者として大成し、ドイツに移り住む経緯を丹念に追う。弟ヒューストンの「ドイツ国民至上主義」が兄の「西洋至上主義」と全く違った分野で並列し共存する事実を説き、それぞれの分野で一大権威者としての地位を確立したかにみえるチェンバレン兄弟ではありながら、自国であり母国である英国については必ずしも前向きの評価をしていないのではないか、むしろ何らの言及もなしていない状況にふれ、果たしてそれが「真のコスモポリタン」としてのありかたであろうかと疑問を投げかける。後々、「彼（バジル）は英国嫌いなのだよ」としているサトー翁の言葉やヒューストンの著作の英訳者ミットフォードが「英国人の偏見」について述べていることなどが、その

疑問への妥当性として挙げられる。

三章 草創期のチエンバレン日本学では、チエンバレンが来日後数年にして発表した「日本上代の詩歌」（一八八〇）をとりあげる。これは日本古典文学研究分野における処女作である。その著作に象徴される如く当時の欧人の日本語研究が「まず古典語より」という入門の常道であった経緯を述べる。古武士を師とする語学修練の結実が、その後わずか三年で世に出るのが英訳「古事記」である。古事記を完訳する以前、古典語の世界に没入するチエンバレンの来日初期数年間の成果を象徴し、また旧約聖書詩篇の日本語訳の可能性を模索する論文一編である。万葉集の長歌調を規範に和訳例を示すチエンバレンの努力が理想論にすぎないのではないかと懸念する当時の在日欧人研究者の思惑に反し、著者は、「言文一致・口語化」といった当時の言語教育の理念に流され、共存すべき立場にある古典語教育が軽視される傾向を批判する。チエンバレンの努力は決して理想の産物などでなかったのである。このような観点、示唆の底辺にあるのが明治期以前、

一千年余に及ぶ日本の書記文化の伝統が平安期の言語を基とするいわゆる中古語、すなわち「文語」であったという事実がある。草創期のチェンバレン日本学を象徴する、東京帝国大学で創刊された文科大学紀要第一号に発表されたアイヌとアイヌ語研究をとりあげる。また、チェンバレン以前に、すでに在日英国公使団一行のハリー・パークス、ウィリアム・アストンらが王国時代末期の南島沖繩を訪れた事実をはじめて明らかにし、チェンバレンの琉球研究から、その帰属問題に関する見解を要約する。

四章 国語学界を揺るがすチェンバレンでは、欧人による我が国の古典籍研究でチェンバレンの果たした役割を論じる。『日本上古史評論（原名英譯古事記）』一卷は、チェンバレンによる英文完訳「古事記」の発表後、わずか五年でチェンバレンの英文原著にみる八五ページに及ぶ総論部が和訳され、その和訳部のほとんど各節ごとに当時の東京帝国大学教授小中村清矩はじめ、数人の権威者による評言を付する書である。ついで、チェンバレン以後の欧人による古事記研

究史を欧文日本学の視点から展望する。琉球語が日本語の姉妹語であることを記述証明したチェンバレンの先駆的著作『琉球語の文法と辞典』の背景に、それ以前のチェンバレンの著作「日本口語文典」の存する意義を「琉球語研究への鍵」として論証する。東京帝国大学博言学科奉職以後、壮年期のチェンバレンの献身する日本研究の概要、すなわち言文一致運動、国語のローマ字化運動とチェンバレンの所見の変容経緯、日本口語文典の編纂、ローマ字日本語読本、耶蘇会関係古文献評、などに触れる。「東京帝大文科大学紀要」第一号に発表された「アイヌの言語、神話、地誌論」でアイヌ研究でのチェンバレンの先輩バツチエラー翁との関係を説く。米国エール大学古文書館に眠るハーン関係資料群の存在を初めて学界に紹介する。

第五章 チェンバレンの日本観では、『日本事物百科』（以下「百科」）に注目し、チェンバレンの真骨頂ともすべき一貫した「対西洋」という機軸を基とする精神文化論を取り上げる。発刊以来数版を重ねた「百科」の冒頭緒言部に秘めら

れるチェンバレンの見解を「日本の良識、西洋の良識」という小題のもとに分
析。当時の英国文壇の泰斗の一人であり、チェンバレンの知友でもあったエドウ
イン・アーノルド卿の日本論、日本観をベースに日本の知識人の良識を低俗なり
として直言を避けながらも、欧米の読者に語りかける言葉の魔術師チェンバレン
の真意にメスをあてる。日本人の精神文化を一刀のもとに裁断するチェンバレン
の論拠が「哲学を欠く日本人」「詩歌の真髓の理解を欠く日本人」「真の宗教心に
欠ける日本人」であるとし、このチェンバレンの日本観に真つ向から立ち向か
い、反論と論証に努めるのが、チェンバレンのⅠ・武士道論と神道論、Ⅱ・芭蕉
俳諧論の各節における申請者の所見と批判と論拠である。Ⅰ項の論議に関して反
論の論拠として挙げられるのがハーン、新渡戸稲造、そして独人ジンガーの所見
であり、Ⅱ項のそれとして露人俳諧研究家エリセーエフ、そして日系米人俳諧研
究家ケネス・安田らの前向きな俳諧論を挙げる。日本人の詩情に欠ける点をワー
ズワースを例に日本語が英語に比し詩作に適さないとして揶揄する論議に対し、

むしろワーズワースと芭蕉の詩情には共通する点の多いことをワーズワースが盟友コールリッジらと従来の英国詩壇を支配してきた古典主義、理知的、形式的理念への反動として新たな新風を吹き込む背景ほか具体例をあげて論駁する。申請者の結論をハーンに語らせる形で「真の評価をもたらすもの、真の評価に欠かすことのできないもの、それは理性ではなくて感情です」とのハーンがチェンバレンへ向けて語る語録の一節を以って示す。

第六章 チェンバレン家・琉球王家・宮の下では、チェンバレンがその弟子、杉浦藤四郎に託した日本関係典籍史料群を基とする愛知教育大学図書館内の「チェンバレン・杉浦文庫」について述べる。

第七章 チェンバレンの遺志を継ぐ皇典講究所の俊才では、チェンバレンの研究に関係のある様々な研究者について述べる。皇典講究所出身の田島利三郎とその愛弟子で今日「沖縄学の父」として憧憬される郷土沖縄出身の学究伊波普猷との系譜に触れ、『おもろさうし』『混効験集』の研究には、氏が上田万年の弟子であ

り、上田がチェンバレンの後任者であったことを確認する。

八章、チェンバレン書誌考では、申請者が「王堂チェンバレン―その琉球研究の記録」で紹介したチェンバレンの手になる初期琉球学書誌の概要を述べ、その意義を英文書誌集成本幾編かに基づき再評価する。

九章史料にみる老翁チェンバレンの晩年では、三〇有余年におよぶ日本滞在後、余生をスイスのレマン湖畔におくった老翁の様子を翁の死後間もなく刊行された「バジル・ホオル・チェンバレン先生」や、和洋の新聞雑誌にみる追悼文などを資料として紹介する。生涯を通じて盟友であり論敵でもあったラフカディオ・ハーンに対するチェンバレンの最終的な見解・所見・評価をチェンバレン晩年の遺著ともすべき仏文随想録「いまだ鼠は死なず」にみえるところ。

論文審査の結果の要旨

本論文は、明治の近代国語学・比較言語学の開拓者であり、日本の古典・風俗

を世界に紹介したバジル・ホール・チェンバレンの研究を進めてきた申請者の四〇年におよぶ研究の集大成である。「チェンバレン琉球学を知らずして彼の日本学を語ることはできない」という一貫した申請者の主張に貫かれた本論文は、チェンバレンの膨大な欧文原著、私信、書簡資料、新たな書評群を発掘して丹念に読み解くことによつて、近代日本が西欧の学問と出会った開国直後の英国人研究者チェンバレンと彼の幅広い日本研究全体を再評価しようとするものである。

一八一六年、外祖父の英国海軍キャプテン・バジル・ホールが琉球を訪れて『大琉球島航海探検記』を著して以来チェンバレンと琉球との縁は深く、琉球語と日本語との音韻対応から琉球語が唯一の日本語の姉妹語であることを明らかにした有名な論考をはじめ言語学の多数の業績や、多岐にわたる業績の重要な部分が琉球研究であることを説く。この研究の遂行に欧文原著の徹底検証が必要であるという申請者の主張には十分納得できる。研究の理論的パラダイムとして中核をなすのが、「欧文日本学」であり「欧文琉球学」である。「欧文日本学」の必要

性は申請者の研究・教育経験からの提言で高等教育に有用で示唆に富むものである。申請者は、「チエンバレンを「西洋至上主義者の権化」と位置付け、賞賛一辺倒ではなくさらに踏み込んだ評価を示す。科学的な言語学・国語学の研究成果では見えてこない、古典や日本人の精神生活に対する厳しいチエンバレンの発言の一方で、チエンバレンが琉球に対して格別深い愛情を抱いていたことやラフカディオ・ハーンのような当時の多くの知識人が琉球に対して強い思いを抱いていたことも、今回発掘された私信により明らかにされる。本論文のうち、「五 チエンバレンの日本観」は、審査者全員がその専攻領域から遠く、その評価に際して最も悩まされたところである。チエンバレンの日本観に挑む申請者の論拠、所見が披瀝されるが、「九『日本事物百科』―欧人の日本理解へのガイド」で、『日本事物百科』が版を重ねた理由をひとえに著者チエンバレンの離日後も変わることなく日本に寄せる思いであったとし、初版発行以来補筆改訂が続いていた点をその根拠と解釈する。そしてその追加確認のなかで、「英国の良識」と「日本の

良識」との相違とを読み解こうとする。さらに、アーノルド卿へのエピソードに現れる「詩の世界、その深奥を未だ知らない国と国民」「哲学、思想の存在しない国」などチェンバレンの厳しい指摘を見逃すことなく引いている。ハーンとの関係は、「十 ラフカディオ・ハーン来日の背景」と「十一 日本観の相克―チェンバレン・ローウエル・ハーン」とで、欧米知識人の極東日本に寄せた関心の所在や背景を整理して教えてくれる。そのうえで、「十二 敷島の大和心…」においてチェンバレンの日本人観に迫る構成となっているが、その日本人観の評価は「良く可」に留まるものとしている。その日本人観について目配りを十分に行き届かせたうえ、離日後にヨーロッパで刊行されるのが「新宗教の発見」で、明治の官僚政治家たちが忠君愛国教として作りあげたものが日本の神道である見るチェンバレンの言説は、当時の外国人の神道観からは当然の理解でもあったといえよう。しかもあえて帰国後ヨーロッパで刊行する、その辺りの事情の解明と解説とが期待されてならない。実は、ここで注目しなければならないのは、チェ

ンバレンなどの神道への懐疑論に対して反旗を翻すリード卿の存在である。それを、「今一つの『日本』」として取り立てるのが本論文である。紹介された英文原著二巻は、外国人の神道研究史に大きな刺激を与えてくれるところとなる。

このように本論文は日本で翻訳紹介された文献のみならず、本邦未公開の文献や私信・書評をふんだんに取り入れて、チェンバレンの日本観を総合的に解明しようとした労作であり、チェンバレン研究やチェンバレンに係る欧米の日本学研究者の評価も含めて明治期の欧米から見た日本学再評価への道を開く意欲的な業績であることは間違いない。

しかし、本論文を貫く論調、あるいは個々の事実認識については、疑問や異論も出されるであろう。とくにチェンバレンの業績が、言語、古典文学、風俗、精神文化論、武士道論、俳諧論、神道観などのあまりにも多岐にわたるため申請者の論評には必ずしも全分野において最新の研究成果に対する目配りが充分であるとはいえないことがある。あるいは、チェンバレンの日本学研究の背景を「西洋

至上主義者の権化」としながらも、晩年「科学は有用ではあるが短命である。文学は永続する。」としたチェンバレンの文言が文学者ハーンと人文科学者チェンバレンの日本文化に対するスタンスの差違を表す点についての解説も期待される。

以上、いくつかの課題を有するとはいえ、本論文はチェンバレンの未発表の欧文資料の発掘紹介、チェンバレン研究を通して明治初期の世界の中での日本の位置付けや日本研究を広く紹介し、日本学者チェンバレンの業績の再評価という課題に大きく寄与するものであり、本論文の提出者山口榮鐵は博士（文学）の学位を授与される資格があるものとみとめられる。

平成二十三年三月十一日

主査 國學院大學教授 久野 マリ子 ①

副査 國學院大學教授 諸 星 美智直 ①

副査 國學院大學栃木短期大學教授 中村 幸 弘 ①

副査 岩 手 大 学 教 授 大 野 眞 男 ①